



## 田上 時子のエッセイ

愛犬シンバとの別れと  
動物霊園への問題提起

愛犬シンバが逝った。犬の平均寿命が12歳～16歳といわれるが、シンバは今年16歳、人間の年齢では80歳を超えている。今年に入って外の散歩も億劫がっていたので、別れの日が近いことは覚悟していたが、その日は急にやってきた。

亡くなる一週間前、夜中にゴトゴト、ドスンと音がするので目を覚ますと、ヨタヨタ歩いては、頭を壁にぶつけて倒れる。夜泣きをするので、抱っこしてやると少し収まる。そのくり返し。それ以降食もなく、流動食を口元に持っていても受け付けない。アクエリをスポイドに含ませて飲ませると目は閉じたまま舐める。オムツも初めて使用。その日も抱っこしながら家事を済ませ、床についたが、翌朝冷たくなっていた。

思えば16年間、家族の苦楽を一部始終目撃してきた唯一の動物である。国内旅行は一緒に車で連れて行き、ペットと泊まれるホテルで宿泊するのが常だった。ロング・コート・チチワ特有のクリっとして黒い瞳、4年前に自宅で亡くなった母の遺体の側を離れなかったのが忘れられない。

動物の死骸は「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づいて一般廃棄物とされるので、地方公共団体（清掃局等）へ焼却処理を依頼するが、「愛玩動物として飼われるペットが死んだ時、ゴミ（廃棄物）として焼却するのに抵抗がある飼い主については、動物の死体であっても廃棄物処理法の『汚物又は不要物』には該当しないと考えるため、一般廃棄物の対象としない（環境省 動物（犬猫）の死体取扱いについて）と定め、ペットの死骸処理方法の別の選択肢として、飼い主が、民間事業者又は寺院等へ処理依頼ができる、としている。

家族同様のペットである。ゴミと一緒に焼却するのは憚れ、せめて動物霊園で手厚く火葬してもらおうと、家族との弔いを済ませた後に地元の動物霊園に連れて行った。

動物霊園に着くと、入口付近で待機していた職員の有無を言わせぬ誘導に多少の不信感があったが、言われるままに。全ての行程は10分程度で終わり、最後に受付で清算してください、と言われて受付に行くと、23,760円（22,000円＋消費税）を請求された。一瞬、目が点になったが、内訳を訊ねると、葬祭料16,000円＋埋葬料5,000円＋ドライアイス1,000円という。埋葬とドライアイス費はともかく、（頼んでもいない）葬祭料が16,000円って。確かに僧侶らしい人がシンバの名前を読み上げたが、たかが2,3分の葬祭だった。後でしつこくDMを端々まで見たが、葬祭料の記載はなかった。接遇の順序が逆ではないか。最初、受付でサービスに入る前に内容・費用の説明をするべきではないか。人のお葬式なら事前に見積もり・相談が常識なのに、ペットになるところなのかと、正しいビジネスのあり方ではないという以上にペットロス的心情につけ込んだ対応に不快を感じた。事前に料金を知って、金額に見合わないからそれでは、清掃局で焼却してもらいます、ということになるかということ、そんなことはない。

他の動物霊園を知らないが、今回の受付対応に疑義を感じるのは私だけだろうか。

愛犬への哀悼の意を表すつもりのエッセイが動物霊園へのクレームになったが、問題提起と捉えてもらえたら幸いである。